

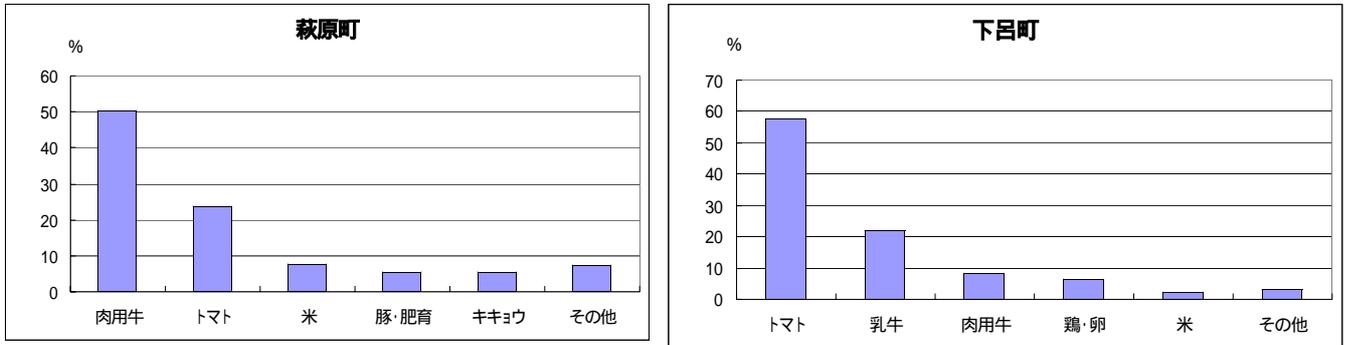
4 資料を利用して地域の特性に興味を持たせることに配慮した授業展開例

教科(科目)	地歴 (地理 B)	単元名	飛驒の農業 本時 (1 時間目 / 6 時)
本時の主題	飛驒の自然環境を生かした農業の特性		
本時の目標	(1) 飛驒の農業特性を、自然環境を含めた固有の地理的条件と結びつけて説明できる力を養い、この事例をもとに他地域の理解に応用することを身に付ける。 【知識・理解】 (2) 飛驒の農業は、地域としてどのように位置付けと、将来の課題について考察する。 【思考・判断】		
指導のねらい	学 習 活 動	指導上の留意点・観点別評価	
・ 本時の学習地域を確認させる。 5分 (経過時間)	飛驒の市町村を確認する。 Question1 飛驒の市町村の名前と位置が一致しますか。 町村名と地図の確認をポイントとする。 資料(5)	Q 1...本校の過半数の生徒は益田郡の多く市町村から通っていることに関連させて関心を持たせる。	
・ 飛驒の農業の特徴を理解させる。 ・ 地域における農業の基幹的役割を理解させる。 20分 ・ 不利な自然条件をどのように克服したのか考察させる。	主要な飛驒の農産物を考察する。 Question 2 グラフの空欄に入る農産物名は何か。 ・ グラフは益田郡の農産物の出荷額を棒グラフにしたもの S : 牛、米、トマト、ほうれんそう、などと答える。 ・ 益田郡の町村の主な農産物を確認する。 資料(1) 飛驒の自然環境の特性を理解する。 飛驒の気温と降水量を岐阜市、松本市と比較して、その特徴を考察する。 資料(2) 岐阜市は暖かい。(5 ぐらい違う) 冷涼 松本市より降水量が多い。 多雨 ・ 野菜や果樹栽培において、夏冷涼であることは甘味のある作物を作るための必要条件であることを理解する。 ・ トマトには十分な灌水が必要のため、飛驒とよく似ている長野と飛驒の気候を理解させる。 飛驒のトマト生産が日本一であることを理解させる。 Question 3 岐阜県とあるがどこが産地だろうか。 関西における市場占有率のグラフとを呈示する。 資料(3) S : 私の近所にトマトのハウスがいくつもある。 夏にトマトを生産しているのはほとんど飛驒地方であることを理解させる。 丹生川村を例に自然をどのように生かし、さらにどのように工夫しながら、農業を行っているか考察する。資料(4) Question 4 2枚(トマトのビニールハウス・ 選果場)の写真からトマト栽培の工夫点を考えさせる。 ・ 観点として、耕作地の整備として耕地の造成、栽培方法の工夫として雨よけ栽培、出荷施設の充実として選果場の新設などが挙げることができる。 丹生川村(飛驒)の農業の今後について考える。 Question 5 日本一の丹生川トマトのに心配なことはないだろうか。 S : 中国、韓国との競合 高齢者増加の心配 過疎化への対応	Q 2...5 択のクイズ形式で農産物名を考えさせる。 ・ 自分たちが生活している地域の自然環境の特性をイメージする。 ・ 過疎の村においても日本一のトマト産地となれることを感動を持って伝える。 Q 3...夏から秋かけて関西の市場において岐阜産のトマトのシェアが40%越えていることに注目させる。 ・ 丹生川村のトマト生産の推移のグラフから、工夫の効果を理解させる。 ・ ビニールハウスでのトマト栽培と近代的な選果場の写真を呈示し、参考とさせる。 ・ 飛驒の農業特性を、自然環境を含めた固有の地理的条件と結びつけて説明する。 【知】 評価方法 発問・拳手・発言	
30分 ・ 飛驒の農業の課題を考察させる。		評価方法 ミニ論文で考えをまとめさせ、事後に確認する。 【思】	
まとめ 50分	・ 本時の内容を農業を考える上での範例とし、次時以降の世界の農業を学習することを予告する。	本時以降の問題提起を行う。	

《指導上のポイント》

- ・今回の授業では授業者が調査したワークシートを使って授業を構成している。テキストは、「収束的な課題をたて、それを核心として地域をまとめていく方法」で構成してある。また、その中に、現代的な諸問題を取り入れることにも留意している。テキストを利用した理由は、資料読解力をつけるのに適していることと課題追究型の学習を行う力を身に付けるのに適していることといえる。
- ・丹生川村のトマト栽培は生産量において日本一といわれる。自然をどのように利用し、その地域にあった農業をつくっていったのかを知ることで、日本の農業全体へ考えを広げさせたい。

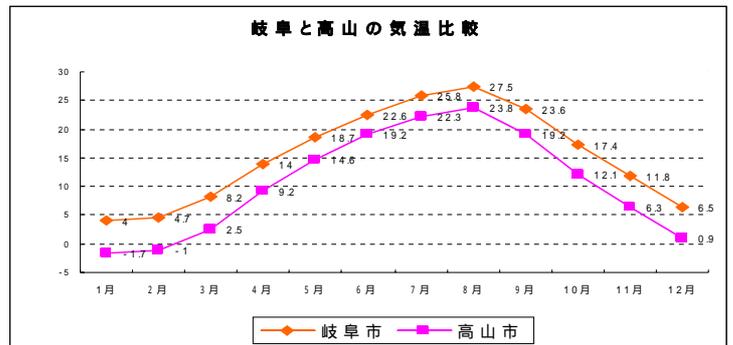
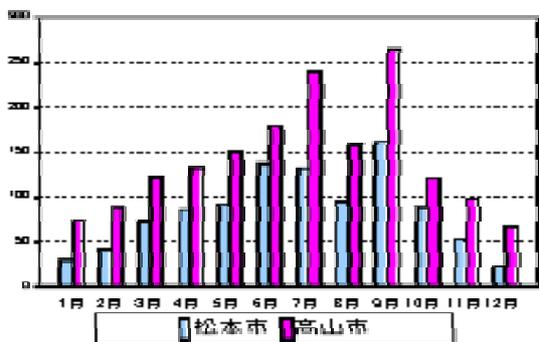
資料(1)「益田郡の農産物」



この他に馬瀬村・小坂町・金山町についても呈示する

資料(2)「高山の気温と降水量」

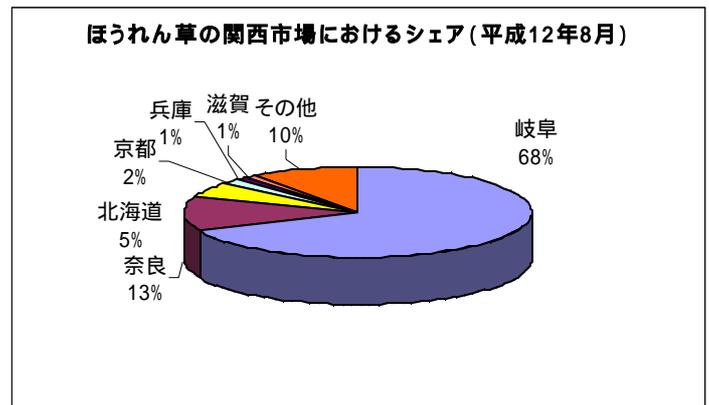
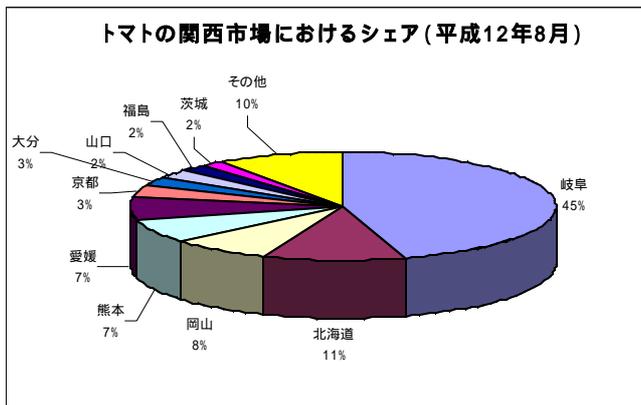
データは高山測候所より入手し、表計算ソフトで加工したもの。気温では、高山の気温が平均5℃高いことを、普段の生活実感から理解させる。降水量では高山(年降水量1702.3mm)と同様の内陸高冷地といえる松本(年降水量1018.6mm)との比較で降水量の差を理解させる。この二つのグラフから高山は冷涼で降水量が多い地域といえる。



資料(3)「トマトとほうれんそうの生産量」

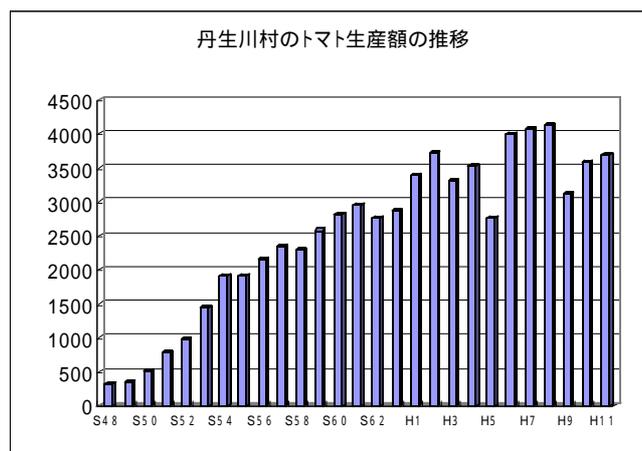
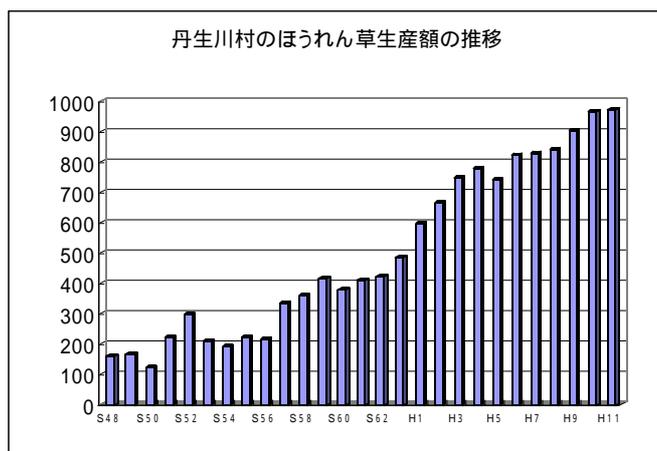
データは『飛騨高冷地青果物販売』より入手し、表計算ソフトで加工したもの。トマトは関西の市場において8月から9月までは40~50%のシェアを持つ。ほうれんそうは5月から10月まで40~70%のシェアを持つ。

(注) 高山は飛騨と読みかえる。



資料(4)「丹生川村のトマトとほうれん草」

データは『農業普及書』より入手し、表計算ソフトで加工したもの。順調に生産量が増えていることに注目させ、その理由を考えさせる。



資料(5) 飛騨の市町村地図

この資料は毎年、地理の授業を始めるにあたり配付している。今回は授業の導入として利用した。



< 単元「世界の農牧業地域」の指導計画(全6時間) >

- 1 時間目 「飛騨の農業」 (本時)
- 2 時間目 「世界の農業地域」
- 3 時間目 「タイの稲作農業」
- 4 時間目 「国際化・情報化の進展」
- 5 時間目 「アメリカ合衆国の穀物農業」
- 6 時間目 「フィリピンのバナナプランテーション」(実物教材)

「上向きの授業スパイラル構築をめざして」

教材開発実践事例を作成するにあたり、「この時間の中で何をテーマにして授業を行い、どのようなことを生徒に理解させるのか。」というねらいを持ち、次の7項目を絶えず自問しながら50分間の授業に取り組んだ。

「何故この発問がここで必要なのか。」

「発問に対して答えを導き出すために必要な資料は何か。」

「予想される答えは何か。」

「発問には全体へアンケート的に挙手させるのか個人的に指名するのか。」

「これは板書して確認すべきことなのか。」

「ここが授業のポイントであるが、上手く説明できただろうか。」

「最後に今日のテーマを理解させることが出来たのか。」

このような授業点検を行いながらの授業は、「何をどこまでできるようになったのか、また考えられるようになったのか」を、その時間内に生徒自身と教師自身に評価をする機会を与える。その評価を利用することで、すぐに次の授業に生かすことができる。すなわち、日々の授業において、生徒がわかる授業を創ることができ、分かるからおもしろい、おもしろいから学ぶという、「上向きの授業スパイラル」を構築していけるのではないだろうか。

さて、私は教員生活20年の区切りとして、岐阜大学の大学院で学ぶ機会を持った。1年次では、主に気候を中心にした自然地理学やドイツ地誌学などの地理の専門学を受講し、2年次では、「岐阜県河合村の人口特性」というテーマでの研究を行った。

この実践事例の4案は従前の授業実践だけでなく、大学院での研修の成果を加味して作成したものである。

授業案の第1案に取り入れている内容は、私の論文のテーマ設定の動機にあたる部分である。同じ調査を「岐阜市」で行うと、世帯によって高齢家族と大学生などの単身世帯の2極分化が見られることが予測でき、地方都市の実情がわかるかもしれない。

大学院の講義を柱にしてつくった授業が第2案と第3案である。

第4案は、地理の教員として“地域から学ぶ”という視点を大切にしているのだが、その中から作ったものである。トマト生産が日本一の丹生川村だけでなく、岐阜県の各地には農業特産品が多くある。糸貫町の柿、高鷲村の大根、美濃加茂市の日本梨、各務ヶ原のにんじん、瑞浪市の採卵鶏など教材化できる事例のヒントとなると考える。

「個々の教師が蓄えている授業実践を、共有できる仕組みが学校間にあるか」と問うてみると、十分に整っているとは言えないかもしれない。そんな意味で、この教材開発検討委員会による取組が、広く活用され、相互の交流の契機となれば幸いである。